

私の作品について：なぜ私はこういうものを書くのか

——あるべき世界とあるまじき世界——

Greatchain

March 24, 2025

私は十数年間、www.dcsociety.org（創造デザイン学会）という私的な言論機関に拠って、言論活動をしてきた。これは新聞のような政治的なものでなく、この惑星と宇宙全体にかかる善悪闘争に参加するものだった。これは当然、敵を作ることになるが、私はこれを苦にせず楽しんでやってきた。善が悪に負けることはないのだから、私が負けるはずはなく、その決着の時期が延びるだけだと考えていた。したがって私は、私を攻撃する人がいても、その人をからかって笑うことはあっても、憎んだり、不愉快な執拗な論戦をしたりしたことは一度もない。その一例はある新聞社に対する「自決のすすめ」という文章である。

<https://www.dcsociety.org/2012/info2012/221223.pdf> (22/12/23)

政府や新聞や NHK は YouTube にどういう姿勢を取っているか知らないが、今 YouTube で中心的話題になっているのは（名を隠した）私である。私が昨年 4 月あたりから「神」によって「選ばれた者」Chosen One となり、現在、私はそういう特別の者として「宣言」することを要請されている。神の敵と戦ってきた功績を、正式に認められたものと考えている。わが国の政府や公的諸機関は、本音として神などというものを認めず、存在しないか、「どちらかといえば」敵だと信じ、民衆にもそう教えているが、この際、この事実をよく知っておかれるよい。今、大転換期といわれて、あなた方の信ずる古い世界が、ひっくり返ろうとしているからである。トランプ大統領も、その重要閣僚であるイーロン・マスク氏も、今、神と私との魔法のような契約に、興味を持っているらしい。

私が神の手助けをすることになった、この世界革命運動は、いま方向が定まったという意味で、一段落したと考えられる。私は勝利した者として扱われている。これは最近のユーチューブ情報に明らかで、現実には神の御業による勝利なのだが、私の勝利のように人々には「現れる」らしい。

私は長い間、神と、人々を神から遠ざけようとする無知で狡猾な者たちの世界の、対立を論じてきたが、91 歳になった現在の自分をよく内省してみると、私の本当にやりたかったことは、そんなものではなかったことに気づいている。それは同じ神とアンチ神がテーマだとも言えるが、正確に言えば、あるべき世界とあるまじき世界の対立と言ってもよい。

私の内部にあるそのものは、厳しく美しい言語芸術といった形で現れる。そしてそれは、今から39年も前の1986年にその萌芽が始まっていた。私は自分が何かを忘れていて、取り出さねばならないものがある、という想いにずっと捕らえられていた。

私はこれを、年寄りの特権を利用して、伝記のように書いてみようと思う。(伝記はすでに「神に選ばれた者」の責任として、いくつか書いている。)私はある小冊子に、杜甫の七言律詩や五言律詩の英語による翻案(翻訳ではない)を、十篇ほど、原詩にその日本語読みをくっつけて掲載しており、あと私独自の英語の詩が16篇ほどあるが、そのほとんどの詩が、ソネット(十四行詩)という非常に厳しい詩型になっている。私は自由詩は、書けないし書かない。その理由はすでに述べたので繰り返さない。私はこういうものを(いくつかの俳句も含めて)いわば宿命として書き、ほとんど倫理の問題のように、発表しなければならないかのように感じている。そうしなければ、死んでも死に切れないと思うようになった。これはおそらく、自分の気に入ったいくつか作品が、埋もれ、人目に触れぬまま放置されたとしたら、死んでも死に切れない画家や彫刻家も同じであろう。

次にあげる例は、ソネットではないが、この女流米詩人(1830-86)の好んで用いた詩型を真似たもので、醸し出す雰囲気も似せている。しかし真似ではなく独自のものだという自負を、私は持っている。

After Emily Dickinson

Beauty, as Pain, has its limit—
Beyond is a numbèd Tract—
The bewitched Rower down the river
Foreknows that Cataract—

The faster Flow—the louder Noise—
Send Terror in his blood—
Yet something whispers, “Let go the Oars!”
And down he goes like Lead—

The Trees flitting—the Boat reeling—
His Doom now close at hand—
In Ecstasy caught up yet falling—
He clings—Hair on end—

Only to know—for Bliss or Curse—
No wakeful Fall can be
The human Lot—nor yet to die
The Ultimate to see—

実はこの詩について、奇妙な話を公表しなければならない。一昨日、どの作品を選ぼうかと私は迷っていた。しかし私の英詩集のパンフレットの中で、この「Emily Dickinson に倣って」という詩が、奇妙に自己主張しているように思えた。そしてそれを感じながら、私は、ある女性タロット・リーダーが、私について論ずる動画を見ていた。そこで、このページを開いて横に置いてみた。すると、この女性は興奮しながら「今、何かが動きました」と言った。しばらくして、ある「ヨガ教師」の札が出てきた。するとこの女性は「ああ、この方（私）は、西洋でヨガの訓練をしたことがあるのですね」と言った。しかし私にそんな経験はない。そこで私に直観が働いて、これはエミリー・ディキンソンのことかもしれないと思った。そこで早速 ED を Google で調べてみると、果たして、この詩人がかなり習慣的にヨガを習っていたという記事が出てきた。これは、ED その人が、その場に臨在したとしか解釈できないだろう。——私は一も二もなくこの詩を選んだ。

なお余談だが、このとき「Circe」という女性の描かれた札が出てきて、彼女は知らないと言ったが、これはホメロスの『オデュッセイ』に出てくる魔女キルケのことで、私にとっても ED にとってもこれは重要な札である。